

「声」をもとめて

——子どもが読むはじめての文学、その現在——

宮川 健郎

「聞くことのコップ」が満ちるまで

特集「子どもが読むはじめての文学」への寄稿を依頼された。編集委員会からの手紙には、こう書かれていた。

〈これまで、保護者等が読み聞かせをする絵本の世界とは異なり、子どもが自分で手にとって読む文学については「幼年文学」という呼称で、その重要性について『日本児童文学』誌上でも、何度となく取り上げられ、論議がなされてきました。

しかし、「幼年文学」という呼称は児童文学界にのみ通用する用語で、一般的にはあまり馴染みがありません。また、文字を覚えたばかりの就学期前後の子どもたちに長い間読み継がれている書物がある一方、なかなか今の子どもたちにフィットする書物が少ないという指摘もあります。

……
手紙を読んで、絵本だけでなく、幼年文学も、まずは、子どもたちが読んでもらう本なのではないかと考えた。

読み聞かせがブームのようになった十年くらい前からだろうか、子どものそばにいる大人たち、親、教師、図書館

の児童サービスの人たちなどから、子どもたちは、読み聞かせやお話し会は大いに楽しむのに、なかなか一人読みに移れないという、なげきのようなことばを聞くことが多くなった。子どもたちを早く大きくしたいという、独特の焦りも感じられることばで、私は、まだ読み聞かせが足りないのではないですかと答えたりする。

日本語は文字をとまなう言語だが、学齢期前後までの子どもたちは、「無文字」の時期を生きている。日本語によってつくられる文化は、W・J・オングヴふうにいえば『声の文化と文字の文化』一九八二年／桜井直文他訳、藤原書店、一九九一年）、「文字の文化」にほかならないけれども、幼い子どもたちは、「声の文化」のなかにいる。小学校に入学したから、すぐに「文字の文化」のなかに入るかという、そうではないだろう。小学校低学年の子どもは、たとえば、「乾電池」を「電気」といって、大人に訂正されたりする。彼は、ことばを文字によって把握しているのではなく、耳で聞いてつかまえているのだ。「でんち」と「でんき」は、音が似ている。それに、彼は、「でんち」を「でんき」といったっていいじゃないかと思っている。